



Title	なぜ日本語の受身文は中国語より多く使われるのか：中日対訳の話し言葉に注目して
Author(s)	陳, 冬妹
Citation	間谷論集. 2019, 13, p. 113-136
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89861
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

なぜ日本語の受身文は中国語より多く使われるのか —中日対訳の話し言葉に注目して—

陳 冬 姝

〈キーワード〉 日中受身文 対照言語学 視点の制約 中立の叙述 話し言葉

1. はじめに

下の(1)と(2)が示すように、日本語と中国語の双方に受身文は存在し、日中対照言語学の研究領域において、両者の比較に関してこれまで多くの研究がなされてきた。というのも、無標の能動文に比べると、日本語の受身文では述語動詞の後ろに「-are/rare-」が付加され、中国語の最も典型的な有標受身文¹では主語の後ろに“被”が付加されているため、両者はいずれも有標の構文であるほか、被動作者が出来事から影響を受けていることを表しているという意味的特徴においても共通しているためである。

(1) 太郎が花子に殴られた。
 (2) 太郎 被 花子 打 了。

太郎 BEI 花子 殴る LE

しかし、実際の会話では、日本語と中国語の有標受身文の使用頻度や使用状況に大きな差異が見られる。筆者が中国のテレビドラマや映画の会話から収集してきた中国語オリジナル音声の“被”構文と、日本語吹き替え音声の受身文を比べてみると、後者は前者よりはるかに使用される頻度が多かった。また、日本語吹き替え音声の受身文のほとんどは、(3)と(4)で示しているように、中国語の“被”構文以外の形式((3) aが能動文、(4) aが使役文²)と対応しているのである。

(3) a. 侯嘉：你要是放弃这里的工作，跟我去外地受苦，
 あなたもし諦めるこここの仕事僕と行く他の土地辛い目に遭う

你家人会恨我。

君の家族はずだ憎む僕

b. ホージャ：僕と遠くへ行って苦労をさせたら、ご両親に憎まれるなあ。

(《情人结》)

(4) a. 潘玉龙：客人让我抢银行，我也去吗。
 客使役僕強盗をする僕も行くか

b. パンユーロン：強盗を頼まれてもできません。

(《五星大饭店》)

そこで本稿では、(3) と (4) のような会話データにおける日中受身文の使用頻度及び日本語吹き替え音声の受身文に相当する中国語のもとの構文について調査した。その結果をもとに、日本語の受身文が“被”構文より多く使用されているのは、両言語の「視点の制約」と「中立の叙述」の差異によるものだと主張する。

2. 日中受身文の使用頻度の差異

日中受身文の使用頻度の差については、大河内(1983)をはじめ、すでにいくつかの先行研究(鄭曉青 1999; 王亜新 2016; 森田 1998)で指摘されている。

大河内(1983)は、中国語の受身文が日本語よりはるかに少ない理由として以下の二つを挙げている。一つは“被”的動詞用法には好ましくないことを「受け、蒙る」という意味が含まれているため、中国語の受身文には被害表示という意味的制約があること、もう一つは中国語には“被”を用いないわゆる「受事主語文」が容易に成立することである。一方、日本語には自動詞の迷惑受身以外に、「考えられている」のような報告調の受身表現も多く見られるとしている。

鄭曉青(1999)は中国語と比べると、日本語では日常会話において受身表現が非常に多く使用され、広い範囲に及ぶ動詞の受動形が用いられるが、中国語では変化を問題にせず単なる状態を視野に入れる場合は“被”を用いないとしている。

また、王亜新(2016)は大河内(1983)とほぼ同じ立場を取っている。つまり中国語では動詞の自他の対立体系を持たないため、受動の意味を表すには“被”構文だけではなく、「意味的受動文」や「受動動詞文」³といった「受事主語文」も用いられる一方、日本語では動詞の自他対立の体系を持っており、受動態が自動詞的な役割を果たす場合もあるためであるとしている。

森田(1998)は大河内(1983)、王亜新(2016)、鄭曉青(1999)とは異なり、「視点の一貫性」が日中受身文の使用頻度の差異に関係していると主張している。つまり、日本語では物語を進める際、視点を最後まで一貫させるため、中国語よりも受身文が多く使用されているとしているのである。

しかし、以上の先行研究の結論のほとんどは内省的判断に基づいていたため、実証的調査が欠けているのではないかと考えられる。即ち日本語の受身文の使用頻度は本当に中国語より高いのか、高ければどれほど差があるのか、調査が必要であろう。

3. 日中受身文の相互の対応状況

多くの先行研究(飯嶋2007; 加藤2016; 原田1995; 古賀2011など)が注目してきたのは、「日本語では受身文を用いるのが自然だが、中国語では“被”構文以外の構文形式で表現される場合」と、「中国語では“被”構文を用いるのが自然だが、日本語では受身以外の構文形式で表される場合」の非対称性についてである。

飯嶋(2007)は、論説文における日本語の受身文とそれに対応する中国語の訳文を対象に調査を行った。その結果、中国語では受身文に対応する割合が低く、能動文に対応する割合が高いことが明らかとなった。しかし、加藤(2016)では飯嶋(2007)とは逆の結果が得られている。加藤の日本語の小説における受身形に対応する中国語訳の調査では、“被”構文や受動者主語形式などが全体の60.9%を占め、能動表現は全体の15.6%のみであった。

また、原田(1995)は中国語では能動文が使用されているのに、日本語では受身文が使用されている例に注目し、その理由は「一つの文における視点の一貫性」によるものだと指摘している。

古賀(2011)は日中両言語の受身文の使用範囲の差異に着目し、その差異が生じる原因について視点の制約が大きく関係すると指摘している。つまり、日本語では視点の制約に違反しないように義務的に受身文が使用されていることがあるが、中国語では視点の制約がそれほど強くないという主張である。

しかし、これらの研究は、いずれも小説もしくは論説文といった書き言葉に偏っており、話し言葉における受身文の使用は重視されていなかった。また、日中受身文の差異について、「視点の制約」によるものだという解釈がほとんどで、「視点」以外の要素が関わる場合については十分な説明がなされているとは言えない。

従って、本研究では話し言葉における日中受身文の使用に注目し、まず日本語の受身文と中国語の“被”構文の使用頻度について実証的調査を行う。次に、日本語吹き替え音声の受身文に対応する中国語の原文を9パターンに分類し、それぞれのパターンに属する原文の数を調査する。そして、以上の二つの調査結果を踏まえ、「視点の制約」がどう関与しているのかを検討する。その上で、「視点の制約」では十分説明できない例について「中立の叙述」という観点から説明を加え、「なぜ日本語の受身文は中国語より多く使用されるのか」という問題に対する総括的解釈を試みる。

4. 調査

4-1. 調査対象

本稿では、テレビドラマ《五星大饭店》(2007年放送)と映画《情人结》(2005年上映)の中国語のオリジナル音声における台詞及び、それに対応する日本語吹き替え音声を対象とし、その中から中国語の“被”構文と日本語の受身文を含む前後の会話をそれぞれ抽出し、文字化している。また、“被”構文に相当する日本語吹き替えの訳文と、日本語で受身文に訳された中国語のオリジナル音声もすべて文字化している。談話レベルでデータを収集しており、かつテレビドラマや映画から話し手の身振りや話し振りなども確認できるため、受身文が使用される理由をより正確に考察できると考えられる。

結果として、《五星大饭店》(全30話)の約1336分間からは、中国語の“被”

構文が 34 例、日本語の受身文が 139 例得られた。また、《情人结》の約 112 分間からは、中国語の“被”構文が 6 例、日本語の受身文が 12 例得られた。合計すると、1448 分間のテレビドラマや映画において、オリジナル音声における“被”構文は 40 例のみで、吹き替え音声における日本語の受身文は 151 例に上った。

4-2. 日中受身文の使用頻度の調査結果

以上、同じ 1448 分間において、中国語の“被”構文の出現数は 40 であり、日本語の受身文の出現数は 151 例であったという結果を棒グラフで示すと、以下の図 1 のようになる。即ち、テレビドラマ / 映画における日本語の受身文の使用頻度は中国語の“被”構文の約 $(151 \div 40 \approx)$ 3.8 倍である。このように、日本語で受身文が多く使用されるという先行研究の主張は本調査において実証された。

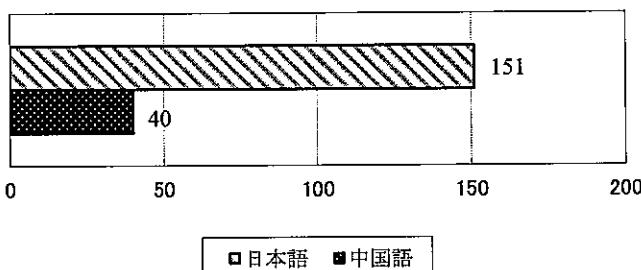


図 1 日中受身文の使用頻度

4-3. 日本語吹き替え音声の受身文に相当する中国語の調査結果

2 節すでに述べたように、中国語で動作や働きを受ける側を主語とする構文には、“被”構文が唯一の形式ではなく、“被”を用いないいわゆる「受事主語文」も存在すると言われている。「受事主語文」にはさらに「意味上の受動文」⁴「語彙レベルの受動文」⁵と「“是……的”構文」⁶などが挙げられる。そのため、調査から得られた日本語の受身文が中国語の“被”構文より 111 例も多かったのは、その中の多くが「受事主語文」から訳されているからだという可能性がある。

ここで、この151例の日本語の受身文がどのような中国語の文から訳されているのかを調査してみる。「受事主語文」⁷を含め、中国語の文をさらに「能動文」「被構文」「意訳」「自動詞文」「無対応」「使役文」「熟語・名詞」と「有構文」の9パターンに分類し、それぞれのパターンに属する文の数を合計した。結果は表1のように数の降順序で示している。紙幅の都合上、「⑤自動詞文」「⑥無対応」「⑧熟語・名詞」「⑨「有」構文」などについては、第6節で詳しく説明する。

表1 日本語吹き替え音声の受身文に対応する中国語の原文

構文のパターン	数 (割合)
① 能動文	79 (52.3%)
② “被”構文	19 (12.6%)
③ 受事主語文	18 (11.9%)
④ 意訳	10 (6.6%)
⑤ 自動詞文	6 (4.0%)
⑥ 無対応	6 (4.0%)
⑦ 使役文	5 (3.3%)
⑧ 熟語・名詞	5 (3.3%)
⑨ “有”構文	3 (2.0%)

表1から明らかのように、151例の日本語吹き替え音声の受身文のうち、79例（全体の52.3%）が中国語の「能動文」から訳されていることが分かる。それに対して、「被構文」から日本語の受身文に訳された数は全体の12.6%にあたる19例しかなく、また「受事主語文」の数も18例のみであった。この結果から、中国語の「受事主語文」の存在は、日中受身文の使用頻度に差異が生まれる最も主要な理由ではなく、ほかに要因があると考えられる。

5. 視点の制約

前節の調査から、テレビドラマ《五星大饭店》と映画《情人结》において、日本語の吹き替え音声における受身文の数は中国語のオリジナル音声における

“被”構文の数の3.8倍であり、かつその中の52.3%（79例）が中国語の能動文から訳されていることが明らかとなった。陳（2016）は、中国語の能動文が日本語の受身文に訳されているのは、日本語の談話上の要因、つまり「自己の視点」（主語を「私」に立てること）と「視点の一貫性」（主語を一致させること）が働いているためであると主張している。本節では、このような視点の制約が日本語の受身文の使用にどう影響しているのかを量的調査に基づいてさらに詳しく述べたい。

日本語において、能動文と受身文のいずれを選択するかという問題は視点の制約と大きく関わっていると言わされてきた。

（5） ?? その時、太郎が僕に殴られた。（久野 1978：146）

例えば、久野（1978）は「視点（カメラ・アングル）」と「共感度（Empathy）」という概念を提唱し、（5）が不自然なのは、下の「表層構造の視点ハイアラーキー」と「発話当事者の視点ハイアラーキー」の間に矛盾が生じたためであると指摘している。つまり、「表層構造の視点ハイアラーキー」では主語寄りの視点を要求する一方、「発話当事者の視点ハイアラーキー」では話し手の「私」寄りの視点を要求するが、（5）では話し手が最も共感しやすい一人称の「僕」が主語の位置に現れていないため、同一の文においてこの二つの視点の位置に矛盾が生じているのである。

表層構造の視点ハイアラーキー

一般的に言って、話し手は、主語寄りの視点を取ることが一番容易である。目的語寄りの視点をとることは、主語寄りの視点を取るのより困難である。受身文の旧主語（対応する能動文の主語）寄りの視点を取るのは、最も困難である。

E（主語）> E（目的語）> E（受身文の旧主語）

（久野 1978:169）

発話当事者の視点ハイアラーキー

話し手は、常に自分の視点をとらなければならず、自分より他人寄りの視点をとることができない。

1 = E (一人称) > E (二・三人称)

(久野 1978:146)

上の共感度階層に関わる視点の制約以外に、久野 (1978) は以下の「視点の一貫性」の原則を提唱し、それが「文毎に独立して適用するだけでなく、『従属文+主文』」(久野 1978:159) という複文全体にも適用すると論じている。

視点の一貫性

单一の文は、共感度関係に論理的矛盾を含んではいけない。

(久野 1978:136)

実際、筆者が収集した例文では、主語を「私」に立てるため、あるいは主語を同じものに固定するために用いられる日本語の受身文が多かった。

(6) a. 杨悦母亲：刚才 医生 告诉 我 了，她就是好，也站不起来了。

さっき 医者 伝える 私 LE 彼女が回復しても、もう立たない

b. ヤンユエの母：さっきお医者さんに言われたわ。もうこの先歩くことはできないって。 (《五星大饭店》)

例えば、(6) a の下線部では“医生”を主語にして、能動文で表現しているが、(6) b の日本語では「私」に視点を置いて受身文に訳されている。

(6) のような例以外に、下の (7) のように、一人称の「私」ではなく、話し手のよりウチだと感じる領域のものを主語にさせるために受身文で表現している例もしばしば見られた。

(7) a. 潘玉龙：他们 怎么 把 钢琴 搬 走 了？

彼ら なぜ BA ピアノ 運ぶ 行く LE

豆豆：我把 它 给 卖 了。

私 BA それ 给 売る LE

b. パンユーロン：ピアノが運ばれているけど。

トウトウ：売ったの。

（《五星大饭店》）

(7) は、主人公の“潘玉龙”という人物が家に帰った時、まったく知らない人たちが主人公の彼女である“豆豆”的ピアノを家から運んでいったのを見て、彼女に質問している場面である。オリジナル音声の中国語では、“他们”を主語にして、「彼らはどうしてピアノを運んでいったの？」という能動文で表現しているが、日本語吹き替え音声では、「ピアノ」を主語にして受身文に訳している。もちろん、(7) a を下の (7) c のような能動文に直訳してもそれほど不自然ではない。

(7) c. パンユーロン：あの人達なんでピアノを運んでいるの？

ただし、(7) c では「あの人達」を主語に立て、出来事を中立的に描写しているのに対し、(7) b では「ピアノ」が主語になっているため、主人公の恋人である“豆豆”的立場から寄り添って発話しているニュアンスが読み取れる。つまり、同じ出来事に対して、同一言語において能動文で表現するか、それとも受身文で表現するかというのは程度の問題であり、どちらかしか言えないという絶対的違いではない。(7) の発話場面において、発話者の「パンユーロン」にとって、全く知らない作業員たちよりも、自分が何回も見ていた恋人のピアノのほうが間違いなく身近な存在である。そのため、訳者が (7) a の無標の能動文をわざわざ日本語の有標の受身文に訳したのも、「あの人達」に比べ、「ピアノ」のほうにより共感しやすいためであると考えられる。

このことから言えるのは、話し手が視点を取りやすいものには、必ずしも一人称に限らないということである。この点については、志波(2003)では「話し手

の視点は基本的に文の主語が担うため、話し手に近いもの、話し手がより自らのウチの領域と感じるものを主語にして事態を表現することを好む」(志波 2003: 67) と指摘されている。従って、(7) b のような無情物受身文の使用を解釈するためには、久野(1978)の「発話当事者の視点ハイアラーキー」の適用範囲をより広義的に捉える必要があるであろう。

次に主語を同じものに固定するために用いられる例を見てみよう。

(8) a. 潘玉龙: 因为 她 以为 我 欺骗了 她, 她 只 需要

理由 彼女 思う 私 端した・ 彼女 彼女 ただ 必要する

单纯的爱, 只 需要 真相。

純粹な爱 ただ 必要する 真実

b. パンユーロン: 裏切られたと思ったんでしょう。彼女が求めていたのは
純粹な爱と真実だけなのに。 (《五星大饭店》)

(9) a. 杨悦: 恐怕, 不是 你 慢慢 适应 她,

恐らく ではない あなた だんだん 慣れる 彼女

而是 她 慢慢 接受 你 了。

肯定を表す 彼女 だんだん 受け入れる あなた LE

b. ヤンユエ: あなたが慣れてきたんじやなくて、受け入れられてきた。

(《五星大饭店》)

(8) a の下線部分を見ると、「彼女は私が彼女を騙したと思っている」という能動文で表現されており、主節では主語が「彼女」で、従属節では「私」が主語になっている。しかし、(8) b では、「裏切られた」という受身文表現を使用することによって、文の主語を「彼女」に統一することができる。

また、(9) a の中国語では、「あなたがだんだん彼女に慣れたのではなく、彼女があなたをだんだん受け入れたんだ」というように、複文の前後の主語が異なっているが、(9) b の日本語訳では、受身表現が後半の部分で用いられ、複文全体において視点が「あなた」に一貫していることが分かる。

このように、久野(1978)が主張している「視点の一貫性」の制約が話し言葉において働いていることが確認された。

しかし、下の(10)bと(11)bは、上の2例とは少し異なり、単文あるいは複文レベルで視点が一致しているのではなく、発話全体のレベルにおいて視点が一致している。

(10) a. 侯嘉：我把收到的情书，都当面退给人家了，

僕 BA 受け取った ラブレター すべて 当面 返す 人たち LE

他们叫我僵尸。

彼ら 呼ぶ 僕 ソンビ

b. ホウジャー：僕はラブレターを全部突き返した。おかげで、冷たい堅物
だと思われてる。 (《情人结》)

(11) a. 潘玉龙：可如果我不打电话回酒店的话，他们¹会认为

でももし僕電話しないへホテル場合、彼らはずだ思う

我们失踪了，他们会报告公安局，警察一样会找到我们的。

私たち 失踪 LE 彼らが警察に報告すると、結局警察が私たちを見つけてしまう

b. パンユーロン：でもホテルに報告しないと、失踪したと思われてしまい
ます。警察沙汰になれば結局見つかってしますよ。 (《五星大饭店》)

(10)aの中国語において、発話の前半部分の主語は“我”(僕)であり、後半部分の主語は“他们”(彼ら)に転換しているのに対し、(10)bの日本語において、「思われてる」の使用で発話全体の主語が「僕」に固定されている。

また、(11)aの中国語では主語が“我”→“他们”→“他们”→“警察”的順に転換しているが、(11)bの日本語では主語が最初から最後まで一人称に固定されていることが分かる。なお、ここで注目されたいのは、(11)aの“一样会找到我们的”(結局警察が私たちを見つけてしまう)という能動文に対して、(11)bの後半では受身ではない自動詞の「見つかる」を使用している点である。

ここで、受身形同様、自動詞も「視点の一貫性」を満たすために使われる手段の一つであることが分かる。

以上、久野(1978)の「発話当事者の視点ハイアラーキー」と「視点の一貫性」が話し言葉において存在することが確認された。しかし、(7) bのような無情物主語の受身文、(10) bと(11) bのような発話全体で視点が統一されている例に関しては、今の久野の視点の規則では十分説明できない点もある。なお、久野の視点の規則をより広義的に捉えることによって、(7) b、(10) bと(11) bも同じ「視点の制約」という観点から解釈できると考えられる。本稿では志波(2003)の日本語の主語選択の傾向⁹と、奥津(1983)の「視点固定の原則」¹⁰を参考に、久野(1978)の視点の規則と合わせ、以下の「ウチの視点」と「視点の固定」の制約を提案したい。

ウチの視点

話し手は、常に自分のウチだと感じる領域のものに視点を置かなければならず、ウチよりソト寄りの視点を取ることができない。

視点の固定

日本語では、同一の文中（複文を含め）あるいは同一の発話内において、特別な理由がない限り、視点を同じものに固定しなければならない。

なお、ここで注意されたいのは、(10) bと(11) bは受身表現を用いることで、発話全体の視点が固定されるだけではなく、話し手にとって比較的距離を感じるソトの存在である「彼ら」から、話し手にとってウチの存在である「僕」/「私たち」にも視点を移すことができるという点である。つまり、「ウチの視点」と「視点の固定」の両方が働いているよう見える。ただし、(10) bと(11) bは、「ウチの視点」を取った結果、視点が固定されているよう見えるのか、それとも視点を固定させる手段として、「ウチの視点」を取ったのかは判断しにくい。本節の目的は「ウチの視点」と「視点の固定」の区別を議論することではなく、「ウチの視点」と「視点の固定」の存在を確認した上で、受身文の使用頻度

や中国語の能動文との関係性を考察することである。従って、「ウチの視点」と「視点の固定」は性質上異なるものだと考えられるが、本稿ではあえて両者を区別せず、まとめて「視点の制約」と呼ぶことにする。

では、日本語に受身文が多く使用されるのは、「ウチの視点」と「視点の固定」が影響しているのであろうか。また、このような視点の制約は、「中国語の能動文→日本語訳の受身文」の対応関係が成立する上で最も主要な原因なのであろうか。ここで、収集した 151 例の日本語吹き替え音声の受身文を対象に、以下のアとイの二つの条件のいずれかを満たせば、「視点の制約が働いている例」だと判断し、その数を集計した。

- ア. 中国語のオリジナル音声では、主語に立つものは話し手がソトの領域だと感じるものであるが、対応する日本語吹き替え音声の受身文では、主語に立つものは話し手がウチの領域だと感じるものに変わっている場合。
- イ. 中国語のオリジナル音声では、同一の文、あるいは同一の発話において、主語は一致していないが、対応する日本語吹き替え音声の受身文、あるいは受身文を含む前後の談話において、主語が最初から最後まで同じものに固定されている場合。

さらに、これらの例のうち、中国語の能動文から訳されているものを抽出し、その数を集計した。結果は表 2 の通りである。

表 2 「視点の制約」と受身文の使用及び中国語の能動文との関係

「視点の制約」が働いている例	その中の能動文の例
53（全体の 35.1%）	50（全体の 33.1%）

表 2 から、日本語吹き替え音声で使用されている受身文の 151 例のうち、53 例（35.1%）が「視点の制約」に従っており、尚且つそのうちの使役文の 3 例を除いて、残りの 50 例がすべて中国語の能動文から訳されていることが分かる。言い換えれば、151 例の受身文のうち、79 例が中国語の「能動文」から訳されて

いるが、さらにその79例のうち、50例も「視点の制約」に従うために能動文からわざわざ受身文に訳しているのである。

以上から、「ウチの視点」あるいは「視点の固定」は日本語の受身文が頻繁に使用されるのに大きく影響を与えており、「中国語の能動文→日本語訳の受身文」の対応関係が成立する上で最大の要因であることが明らかとなった。

6. 中立の叙述

以上、「視点の制約」と日本語の受身文の使用率及び、対応する中国語の能動文との関係性を確認してきた。しかし、表1で示しているように、日本語の受身文は中国語の「能動文」に対応する以外に、「受事主語文」「自動詞文」「無対応」「熟語・名詞」「“有”構文」などに相当している場合も見られる。つまり、日本語の受身文が中国語より多く使用されるのは、「視点の制約」以外の要素も関わっているのである。続いては、これらの構文と、その訳である日本語の受身文を取り上げ、なぜ日本語で受身文を選択しているのかを検討する。

「受事主語文」に相当する例

(12) a. 杨悦：既然 遗嘱 对 所有的受益人 都 是 公开 的,
 ~である以上 遺言状 ~に対して あらゆる相続人 すべて 是 公開 的

那 我的当事人 作为 受益人之一, 想要 再 亲眼
 接続詞 私のクライアント として 受益者一人 ~したい 再び 自らの目で

看一下 遗嘱的原件, 应该是可以的吧。

見てみる 遺言状の原本 できるじゃないか

b. ヤンユエ：遺言状は相続人に開示されるものです。私のクライアントは
 相続権を持つので、直接原本を見る権利もあるはずですが、
 いかがですか？ (《五星大饭店》)

(12) は中国語の「“是……的”構文」という「受事主語文」が日本語の受身文に訳された例である。(12) aは、“楊悦”という主人公が代理弁護士として被告人側の弁護士に遺言状の原本を見せてもらうための発話である。そこで最初

に“遗嘱”（遺言状）を主語に立て、遺言状の原本を見る正当な理由として、“既然遗嘱对所有的受益人都是公开的”「遺言状は相続人に開示されるものです」というように、その“遗嘱”的特徴を発言している。(12) a、(12) b は共に利害性のない中立的な文であるが、中国語では「受事主語文」、日本語では受身文を使用している。(12) b のような、ある対象の特徴あるいは属性を述べることを目的にして非情物を主語に昇格させる受身文について、益岡(1982) は「属性叙述受動文」と呼んでいる。それに対して、中国語の“被”構文にはある対象の属性や特徴を叙述する機能が相当的弱いため、“被”構文以外の構文形式、例えば「是……的」構文」が代わりにその機能を担っていると考えられる。

「自動詞文」に相当する例

(13) a. 黄总：在国外，公司的财产纠纷和遗产纠纷，一旦进入

海外では 企業 の 財産の争い と 遺産の争い ～となると 入る

司法程序，官司一打，就是 三年五载，

法律上の手続き 訴訟を起こしたら 強い肯定を表す 4、5年

在诉讼期间，公司的运行，肯定会受到影响。

訴訟の期間では 会社の運営 必ず影響を受ける

b. 黄社長：海外では企業オーナーの相続問題が法廷に持ち込まれると、4、

5年かかるらしい。訴訟が起きれば、会社経営にも必ず影響が出る。

(《五星大饭店》)

本稿で取り扱う「自動詞文」とは、主語に立つものが動作主や被動作者のいずれでもない非情物で、かつ述語動詞が目的語を取らない文を指す¹¹。例えば、(13) a の下線文の中国語を直訳すれば、「企業の財産と遺産の争いが法律上の手続きに入ると」というような自動詞文になるが、(13) b では「持ち込まれる」という受身表現を用いて動作の実現を表している。(13) b のような受身文は、話し手に対する影響性がほとんどなく、中立的に出来事の実現を表している。一方、(13) b を (14) のような中国語の“被”構文に訳してみると、文としては不自然ではないが、(13) a のように出来事を中立的に描写しているのではなく、

「被帶入法庭」(法廷に持ち込まれる) という事態から誰かがマイナスな影響を受けている迷惑性が読み取れる。このことから言えることは、中国語の“被”構文は日本語の受身文に比べると、「何の影響性もなく、自由に出来事の実現を中立的に叙述することがそれほど容易ではない」ということである。

(14) 在国外, 公司的财产纠纷和遗产纠纷, 一旦被帶入法庭, 官司一打, 就是三年五载。在诉讼期间, 公司的运行, 肯定会受到影响。(筆者訳)

「無対応」に相当する例

(15) a. 经理: 欢迎 你们 即将 加入 万乘大酒店 贴身管家的行列,

歓迎する 君たち もうすぐ 加入する 万乗ホテル バトラーの列

你们 是 100 多名 报名者当中的优胜者。

君たち 断定 100名以上 応募者の中の優勝者

b. マネージャー: 本日君たちを万乘ホテルバトラー候補選としてここに迎える。君たちは 100 名以上の受験者から選ばれたエリートだ。

(《五星大饭店》)

「無対応」とは、中国語のオリジナル音声には現れていない内容が日本語の受身文に訳されている場合である。例えば、(15) a の下線部分に対して、(15) b では「選ばれた」という原文には全くない内容が加えられ、文脈における受動関係がはっきり表されている。もちろん (15) b は (12) b 、(13) b と同じように、あまり利害の意味が感じられない受身表現である。

逆に、(15) b の下線部を中国語に再訳しようとすると、以下の (16) a の“被”構文、あるいは (17) a のような動詞“选”(選ぶ)の動作主が省略される文という 2 パターンが考えられる。

(16) a. 你们是从 100 多名报名者当中被选出来的优胜者。(筆者訳)

b. 君たちは 100 名以上の応募者から選ばれたエリートだ。

(17) a. 你们是从 100 多名报名者当中选出来的优胜者。(筆者訳)

b. 君たちは 100 名以上の応募者から選んだエリートだ。

(16) a、(17) a と (16) b、(17) b をそれぞれ中国語母語話者 5 名と日本語母語話者 5 名に対して自然度を確認した結果、中国語母語話者 5 名のうち、4 名が (17) a がより自然だと答え、逆に日本語母語話者 5 名の全員が (16) b が明らかに自然だと答えた。つまり、利害の意味があまり読み取れず、受動の関係だけを表す中立の受身表現について、中国語では“被”構文よりも、それ以外の構文の方が好まれていると言える。

「熟語・名詞」に相当する例

(18) a. 潘玉龙：贡娃雪山？为什么还要去贡娃雪山？

金志爱：在我 穷途末路 的时候，贡娃雪山给了好运。

に 私 行き詰まり の 時 ゴンア山が私に幸運をくれた

b. パンユーロン：ゴンア山、どうしてあの雪山に？

キムジエ：すごく追い詰められていた時に、あの山が私を助けてくれたから。

(《五星大饭店》)

「熟語・名詞」とは本来の中国語では熟語あるいは名詞が使用されている部分が、日本語吹き替え音声では受身表現に訳されているというような場合である。例えば、(18) a では“穷途末路”（行き詰まり）という四字熟語を用いて当時の苦しかった状態を表しているのに対し、(18) b では「追い詰められていた」という受身表現を使用して主人公の“金志爱”が大変な状態であることを表している。(18) b は、話し手自身が大変な状況に置かれていたという受身的な立場が読み取れる点で (18) a とは異なる。実際、“金志爱”がここで“穷途末路的时 候”と言うのは、今まで家族の財産の争いに巻き込まれ、追いかけられたり、命も脅かされたりしたという背景があるためである。このようなコンテキストにおいて、中国語では (19) のような受身表現を選ぶことも可能である。

(19) 在 我 被 遇 入 绝境 的时候, 贡娃雪山给了^我好运。(筆者訳)

に 私 BEI 遇い詰める 入る 痞地 の時 ゴンア山が私に幸運をくれた

この例について、日本語には“穷途末路”という熟語にぴったりと合う表現がないため、訳者はコンテキストの情報に従って受身表現に訳したと考えられる。

「“有”構文」に相当する例

(20) a. 经理: 只要 签单, 就会 有 记录。

～したら サイン すぐに ある 記録

b. マネージャー: サインしたら、すぐに記録されるのですが。

(《五星大饭店》)

最後に、「“有”構文」が日本語の受身文に訳された例を見られたい。

刘ほか(1991)は“有”について、「非動作動詞であり、動作・行為は表さず、その基本的意味は『所有』、『存在』を表すことにある」(刘月华ほか 1991: 582)としている。つまり、「“有”構文」は基本的に他動性や影響性を表さない構文である。しかし、(20) a 「“有”構文」は (20) b の「記録される」と受身文に訳されている。これは、自動詞を用いた中立的表現に近いと考えてよいであろう。

以上、日本語の受身文がそれぞれ「受事主語文」「自動詞文」「無対応」「熟語・名詞」「“有”構文」に相当するパターンの特徴を考察することを通して、日本語の受身文が属性叙述から、実現の叙述、また単なる受動関係の表明、さらに自動詞的用法まで幅広く対応していることが明らかとなった。これらの文のほとんどに共通しているのは、被動作者に対する影響性が低く、出来事を中立的に叙述している点である。つまり、日本語の受身文は受影響性の叙述から中立の叙述まで多様に使用されているのに対し、中国語は“被”には「被害を蒙る」という意味がまだ強く残っている¹²。従って、被害の読み取れないような中立の出来事に関して、“被”構文を選択せず、他の「受事主語文」や「自動詞文」などを用いることが多いのである。

7. まとめ

以上、本稿では話し言葉における日中受身文の使用に注目し、両者の使用頻度と使用状況の違いを量的調査に基づいて分析を行った。その結果、テレビドラマ/映画において、日本語の吹き替え音声における受身文の使用頻度は、オリジナル音声における中国語の“被”構文の約3.8倍であることと、日本語の受身文全体の52.3%（79例）が中国語の能動文から訳されていることが明らかとなった。このような調査結果に対して、日本語の受身文が中国語より多く使用されるのは、以下の「視点の制約」と「中立の叙述」の2つによるものだと言える。

まず、日本語には「ウチの視点」と「視点の固定」が存在する（5節参照）。しかし、中国語にはこのような視点の制約が存在しないため、話し手のソトの人/ものが動作主の場合、それを主語にして能動文で表現し、または同一文中あるいは同一発話内で視点が自由に転換する。このような視点の制約に違反している中国語の能動文に対し、日本語では受身文に訳すことによって、直訳による視点の矛盾が解消される。すなわち、日本語において、視点の制約の存在は、中国語より受身文を多く使用する最大の要因である。

また、日本語の受身文は受影性の叙述から中立の叙述まで多様に使用されている一方、中国語の“被”には「被害を蒙る」という意味がまだ強く残っている。従って、被害のニュアンスが読み取れないような中立的出来事について、中国語は“被”構文を選択せず、「受事主語文」や「自動詞文」などを用いる（6節参照）。これは日本語の受身文が中国語より多く用いられるもう一つの理由である。

このように、日本語の受身文が中国語の“被”構文に対応しているのはごく一部で、日中受身文の特徴の全体像を捉えるためには、“被”構文のみならず、他の「使役文」「受事主語文」や「自動詞文」なども含めて考察すべきことが分かる。逆に、“被”構文と日本語との対応関係も、日本語の自動詞・他動詞を含めてヴォイス全体の中から捉えなければならないと考えられる。なお、今回のデータには“被”構文の例が少なかったため、日本語の受身文を中心に考察することにとどまった。“被”構文を中心に、日中受身表現全体の構文的機能に関する記述を行うことを課題としたい。

注

- 1 中国語で動作の受け手を主語とする構文にはいくつかの形式が存在するが、本稿で呼ぶ「中国語の受身文」は“被”構文に限定する。なお、本文で研究対象とする“被”構文は、“被”だけではなく、“叫”“让”“给”などの介詞が述語動詞の前に現れる文も含める。
- 2 中国語の使役を表すマーカーとして、“让”“叫”“教”“令”“使”などが挙げられるが、そのうちの“让”“叫”は受身のマーカーとして用いられることがある。朴乡兰(2011)では“教/叫”で表している中国語の受身文は再帰の使役構文 (Reflexive Causative) から発展してきたと指摘されている。
- 3 王亜新(2016)で挙げられている「意味的受動文」と「受動動詞文」について、本研究では刈月华ほか(1991)と飯嶋(2007)を参考に、それぞれ「意味上の受動文」と「語彙レベルの受動文」と呼ぶこととする。
- 4 「意味上の受動文」とは“信已经写好了”(手紙はもう書き上げた)のような主語に置かれるものが動作の受け手でありながら、中国語の受身のマーカーである“被”“叫”“让”“给”などを一切使わず、受動の意味が読み取れる文のことである。なお、鄭曉青(1999)では「意味上の受動文」を「無標識受動文」と呼んでいる。
- 5 「語彙レベルの受動文」とは“现在的中国受到了全世界的注目”(今の中国は世界中から注目されている)のような、主語に置かれるものが動作の受け手であり、実質的受動を表す動詞“挨”“受到”“遭受”“得到”などを伴う文のことである。
- 6 「“是……的”構文」とは“那个事是我做的”(その事は私がしたんだ)のような“是”と“的”の間に焦点が置かれる文のことである。なお、この構文は主語に立つものが被動作者ではない限り、「受事主語文」とは言えない。
- 7 本調査で「受事主語文」に分類しているのは、「意味上の受動文」、「語彙レベルの受動文」、「“是……的”文」と「“由”構文」の4タイプである。
「“由”構文」とは“这事由他牵头”(このことは彼が表立って取りまとめる)のような被動作者を主語に立て、動作主を“由”によって示す文のことである。「“由”構文」について、張谊生(2004)は中国語の“被”構文と同じ視点で出来事を捉えていながら、“被”構文と比べると、結果を明示することが必須ではなく、被害や受影の意味を表さなくてもよいと指摘している。つまり、「“由”構文」は“被”を用いないことと、被動作者が主語に立てられているといった点で「意味上の受動文」、「語彙レベルの受動文」、「“是～的”文」のいずれにも共通している。そのため、本稿では「“由”構文」

を「受事主語文」に分類することとした。

- 8 「能動文」とは主語が述語で表す動作の動作主であり、基本的に中国語のSVOの語順になっている文であるが、本稿では(7)aのような“把”構文も「能動文」に含めている。
- 9 志波(2003)では久野(1978)の共感度階層とDixon(1991)の名詞句階層を踏まえ、「話し手のウチの人>話し手のソトの人>無情物」という日本語の主語選択の傾向を提案し、話し手が最も共感を持つ有情物が被動作者の場合、視点を転換すべく受身文が用いられる述べている。
- 10 奥津(1983)はさらに日本語には「視点固定の原則」が存在し、同じ文中において視点を固定する傾向が強く、日本語の受身文の使用にかなり影響しているという点を指摘している。
- 11 本稿では自動詞であるかどうかの判別はヤーホントフ(1987)を参考にしている。
- 12 唐鉉明(1988)は「被害を蒙る」という“被”的本来の意味は、“被”が中国語の受身のマーカーとして使用されるようになる意味的基盤であると指摘し、王力(1985)なども、「望ましくない事態」を表すことが“被”構文の本来の機能であるとしている。

参考文献

飯嶋美知子 (2007) 「論説文の訳文から見た受動文の日中対照研究—中国語母語話者への教育の一環として—」『早稲田大学日本語教育研究』10 pp.17-30

王亜新 (2016) 「日本語と中国語の受動文に見られる類似点と相違点」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』第18号 pp.41-63

大河内康憲 (1983) 「日・中語の被動表現」『日本語学』4月号 明治書院 pp.31-38

奥津敬一郎 (1983) 「何故受身か?-<視点>からのケース・スタディー」『国語学』132集 pp.65-79

加藤晴子 (2016) 「日中対訳小説に見る受身形の使用状況と視点の関係」『東京外国语大学論集』第92号 pp.65-81

久野暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店

古賀悠太郎 (2011) 「日中両言語における受身文の使用範囲の差異とその原因について」『神戸市外国语大学研究科論集』第14号 pp.11-23

志波彩子 (2003) 「日西受身表現の意味機能 (1) -主語と動作主の現れ方をめぐって」『ス

ペイン語学研究』18 pp.61-85

陳冬妹 (2016) 「受身文からみる日本語と中国語の談話構成の特徴—中日・日中対訳データに基づいて」『日本語・日本文化研究』第26号 pp.127-138

陳冬妹 (2018) 「日本語の受身文と中国語の“被”構文の意味機能と談話機能—テレビドラマの話し言葉を対象に—」『日本語・日本文化研究』第28号 pp.106-117

鄭曉青 (1999) 「受身文の日中対照研究—構文と表現における相違点」『日中言語対照研究論集』創刊1号 pp.90-111

原田寿美子 (1995) 「中国語の受動態について—主語の選択の観点からの問題提起」『名古屋学院大学外国語学部論集』第6巻第2号 pp.231-242

益岡隆志 (1982) 「日本語受動文の意味分析」『言語研究』第82号 pp.48-64

森田良行 (1998) 『日本人の発想、日本語の表現』中央公論社

刘月华・潘文娱乐・故讐 (1991) 『現代中国語文法総覧（下）』片山博美・守屋宏則・平井和之（訳） くろしお出版

ヤーホントフ, C.E. (1987[1957]) 『中国語動詞の研究』橋本萬太郎（訳）白帝社

朴乡兰 (2011) 汉语“教/叫”字句从使役到被动的演变, 《语言科学》第10卷第6期, pp.593-601

杉村博文 (2016) 汉语第一人称施事被动句的类型学意义, 《世界汉语教学》2016年01期, pp.3-15

唐钰明 (1988) 唐至清的“被”字句, 《中国语文》1988年第6期, pp.459-468

王力 (1985) 《中国现代语法》商务印书馆

张谊生 (2004) 试论“由”字被动句—兼论由字句和被字句的区别, 《语言科学》第3卷第3期, pp.38-53

Dixon, R.M.W. (1991) *A new approach to English grammar, on semantic principles*. New York : Oxford University Press.

チン トウシュ (大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程)

Why passive sentences are used more frequently in Japanese than in Chinese

—with a focus on Japanese translations from colloquial Chinese—

CHEN Dongshu

The aim of this article is to attempt to answer why passive sentences are employed more frequently in Japanese than in Chinese. This research is based on colloquial dialogues in Chinese TV dramas and movies with Japanese dubbing. The analysis of the frequency of passive sentences in both Japanese dubbing and the Chinese original versions showed that Japanese passive sentences are used 3.8 times more often than Chinese passive sentences. Furthermore, the survey revealed that 52.3% of passive sentences in Japanese dubbing are translated from active sentences of the original Chinese. The author proposes that the reason for the different ratio of passive sentences in the two languages is due to two important concepts in Japanese passive sentences, which the author calls "Conditional Perspective" and "Neutral Description".

The "Conditional Perspective" can be divided into two subfactors, which are the "Personal Perspective" and the "Fixed Perspective". In Japanese the former is applied when the speaker describes an event involving a person or thing belonging to the speaker's "personal domain". In this case, the person or thing in question has to be expressed as the subject of the sentence, whether it is the agent or the recipient of an event. As for the latter subfactor, the subject has to remain the same unless there is a specific reason. The "Conditional Perspectives" on the other hand doesn't exist in Chinese. Therefore, even if a person or thing belonging to the speaker's "outer domain" is the agent of an event, an active sentence is generally used. In addition, in Chinese the subject does not have to be continuously the same. In consequence, by converting active Chinese sentences into passive Japanese phrases, the discordance between the target of empathy and its position

in the sentence or discourse can be avoided.

As for the "Neutral Description", the author found that passive sentences in Japanese are used in many circumstances ranging from influenced descriptions to neutral ones. Chinese "*bei*" constructions, however, always have a certain connotation of damage, thus making it difficult to express neutral events.